

佐伯と国木田独歩 (註)

中根貞考のついで

会員 山本保

三の礼公園に中根貞考翁の歌碑があります。

(正面文字)

ふるさとの後をふもうし ふるさとの

かほらぬもうし はしきふる里

昭和二十七年春四月

七十四翁 中根貞考

(註) 故里(佐伯、佐伯)が変つていくのは受けがわしいし、

また故里が昔のままであることも気が進まない。いざ

(裏面文字)

中根貞考翁は明治十一年臼杵片切家二生レ、小学校

卒業ヘルト当地中根家ノ嗣トナル。

年少ヨリ秀才ノ誉高ク、東京帝國大学ヲ卒業スルヤ

直ニ日本銀行ニ入り、累進シ理事トナリ、大阪支店

長ノ時、三和銀行ノ創立ニ與リ、請ハルテ其初代頭

取トナル。

永ク吾國金融界ノ重鎮デアツタ。

翁ハ温厚篤真、洵ニ高潔ノ至人デアリ。兼ニ愛郷ノ

情深ク、郷土ノ爲ニソノ勞ヲ各マナカツタ。

茲ニ翁ヲ慕フ者相寄リ其徳ヲ記念セシコトヲ讀ム

翁モト和歌ヲ嗜ム。依ツテ歌碑ヲ建テ仰望ノ稜トス

桃李言ハザレドモ下自ラ躁ヲ成ストハ此謂力。

昭和二十七年四月

安藤正人撰
菅一 郎書

建設委員長 月本小策

(註) ① 中根(旧佐伯片切)貞考が(明治十一年二月四日大分県臼

杵町)に生まれる前年(明治十年六月一日西南の役)

お父さんは戦死しました。

三児をかかえたお父さんがお母さんに同情して、親族の人たちを

「生まれんでもいい子が生まれた」と言つたそうです。その

生まれながらもよい貞考が出生したお母さんは、愛蔵を損

じ貞考が三才の時、若死をいたしました。

そこで兄弟離散、貞考はおかあさんの実家に引きと

られて、おの若い叔母に薫育せられ、小学校を卒業し

た年に、佐伯の中根祿胤の養子となりました。

そして大分中学、熊本五高、東京帝大を経て明治

三十八年日本銀行へ入社しました。(風鈴参照)

② 中根貞考翁の歌碑を建てた人は、月本小策です。

独歩が佐伯滞在中、月本小策経営の月本旅館に

一時下宿していたことは奇しき因縁です。独歩が月

本旅館に下宿したのも中根祿胤の進めによるものと思わ

れます。

中根祿胤、貞考、月本小策、国木由緒が直接に間

接に結ぶつきを持つてゐることは興味深いことです。

中根貞考著「風鈴」(昭和三十四年発行)を御紹介いたし

ます。御鑑賞下さい。

人口はよく生れ故郷のほかに第二の故郷と云うのが

ある。

故郷を去つて他郷で長年生活していると、その土地

に詳しい知れぬ者ができるからである。郷里の臼杵か

ら佐伯も中根家に養子となつて今日に至つてゐる。そ

これに更なる事は佐伯は其の第一の故郷である。白杵は徳川時代稻葉家の白杵藩であり、佐伯は毛利家の佐伯藩であったが、僅々八里の距離しかなく、藩の領地は相接してゐるから風俗習慣が違ふは、その言葉と違ひ、それ程の言葉の訛言も違ひない。生れた白杵の訛言は幼少の時から身につけてゐるが、佐伯の訛言も疾くは身につけて何ともいふ成りなつかしさを覚ゆる。

故郷に帰つてこの訛言での会話ほど親しさをおぼゆるものはない。一昨年の春、数年ぶりて御里に帰つたおたしは、八十に近い身だから、あるいはこれが最後のお国入りだろうと、

なつかしき故郷訪ふも最後ならむ
 十路に近きよはひと思へば
 の一首が自然と浮かび、三百首あまりの「故郷難忘」と題する小歌集を知友に配つた。

とこゝろが最後だろうといつたお国入りを去年の初夏にもやつた。白杵(第一の故郷)を三泊で切り上げ、親族故旧に見送られて、第二の故郷佐伯に帰つた。汽車で僅々四十分(白杵佐伯間)であるが、中停時代(大分中学校)冬の休みには大分から佐伯まで歩いたものであつた。

大分、白杵間山越で八里、白杵から佐伯までも八里八里だが、こちらが津久見峠。鏡峠(津久見張生の境)床木峠という三つの山を越えねばならない。

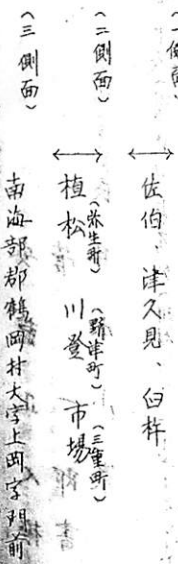
その頃は、まだ汽車がなく、唯一の交通機関は大坂商船の細島通いの二百屯ぐらゐの船だけで、これなら二三時間で行けるのだから、こんな小さい船で

冬は荒海が様々あるのに辟易したのと、一つには、何七銭分の船賃節約の意味もあつての徒歩旅行である。小学校卒業の少し前頃、はじめにかかつた電信がこの山越に電柱を立ててくれたから、堂々たる道標となつた。

坂をぼつぼつ登り、峠の頂上で電信柱に凭つて息をいれてみると、ブーンという音が聞えて来る。仰いで見ると、あるともない山上の風が電信線に当つて、美妙な音を奏してゐるのである。萬籟寂として声なき山上でこの自然の音楽を聞くと、ぼつと一た気持になるが、同時にまた何ともいへぬ寂寞を感じたものである。

今は汽車が通じたから峠を越えるものはないであらう。しかし地方でもバスの発達した今日、自動車を通る道を作る必要に迫られ、海岸寄に津久見までは開通してゐる。

しかしこの植も低いながら山越でいかにも山回らしい。(註)の佐伯市門前三叉路、後藤木十郎氏宅の一隅に次のような道路標識塔(石柱)が立っています。



此の植松の石柱は、建文辛卯月の刻字がある。大分県史編纂委員会

い、三千五百余の軍勢を率いて、津久見、鏡峠を経て、佐伯惟忠の守る相守砦を攻略しました。永木トシネルは佐伯市門前と林生所永木と結ぶ後道への近くにある新門砦は明治三十三年に建てられました。その碑文は秋月新水師の操併書によるものとす。

③寛政年間、広瀬淡窓は日田を出発し、竹田、重所、川登、中谷を経て、佐伯藩松平筑前守の藩子入りをしていました。日田成宜園に入門した佐伯藩の子弟もこの道路を往來したのと思われます。その一人秋月新水師が大坂本村所領(林生所大坂本)全馬橋の碑文を明治三年に書いてあるのも当然だと考えられます。

以上のことから、この二つの道路は、重要な役割りを果していたものと思われます。また寛政元年佐伯藩を訪れ、家老梶野斐令と会見した勘望の志士高山秀九郎も、横松川登、三笠所、竹田を通り、そくて久留米で自及したものと推測されます。

④独歩の書翰より
「行程三十六里(徳赤から佐伯まで)其のうち七七里を馬車に、其地を徒歩にて九州を横断し、一月十三日(明治二十七年)の暮、月光区に河之渡りたる頃、漸く佐伯に降り着き申候し、……」

揚谷守館の冬休まで、御里御井所下帰着九独歩は、再び佐伯へ。途中、阿蘇登山を試み、竹田、三笠、日尾を経て、佐伯に帰つてきました。勿論徒歩です。その徒歩が(二十九里徒歩)には驚きます。因尾(庄五村)の道路を利用して、いることは興味深いことです。

⑤国道二一七号線も佐伯、津久見、臼井間、大部分舗装されて、快適なドライブコースとなりました。景観のすばらしい二級国道線です。

「風鈴」より

佐伯と臼井との距離は二八・六キロ、急行なら三分の短時間であるが、豊後の国は南半分は地價上のりやス海岸で海岸線は突出彎入がはなはだ多い。中央山岳部から走り出た山稜が、ひろげた扇子の骨

のように海中に突入している。だから豊後海峡を拓している佐伯関半島の地蔵崎から、南端日向境の宇戸崎までの間を直線で計れば六〇キロなのに、海岸線の延長はその四倍をはるかに越えるといふ。

湧として日、臼井、津久見、佐伯の三大湾の外、大小無数の小湾入があり、岬として岬屋鼻、観音崎、蒲戸崎、鶴見崎、芹崎、宇戸崎の外、数また左くさんの突端があり、これらが相錯綜する間に大小の島嶼、岩礁が無数に散在し、巨岩怪石上の老松が、有る波つた美しい海に影を落とす。景色は、都人土にも見せたいものと自慢する。左左、こんな地勢だから近距離の間はトシネルが二十余を数え、苦情の種である。

近頃ティール・カー導入の報道があるのは喜ばしい。
(註)近年日豊海岸国定公園指定運動が推し進められて

います。
国定公園の候補地は佐賀崎、洞崎から臼井市、津久見市、上浦町、佐伯市、鶴見町、米水津村、蒲江町、北浦村、北川村、延岡市、門川町、日向市、美々津海岸まで、大分県側は湾曲の美しいリアス式海岸と、蒲江湾一帯のサンゴ礁を強く打ち出しています。
促進協議会を長に日大分米知事木下節、副会長は宮崎県知事黒水博が選出されました。
大分地区蒲江郡市の背後地として、自然美に富んだ豊後水産地域は、将来のレジャー、保養地あるを観光地として期待されてあり、豊後水産地域に連なる延岡、日向海岸は、同地区工業地帯のベッドルームともいふべき観光保養地域です。

再び「風鈴」より

さて佐伯駅に反対のとなり、たくさんの出迎があ

り、いちいち挨拶もできないまま、親戚山名邸に
まといまた入り代り立ち代り知人の来訪である。や
はり技師ならで日の感じである。

山名氏は従兄に当るが、わたしは昨年五つ違いと
思つて教へたところ、実は七つ違ひで、今年(註
三十四年)は米壽に当るのである。昨年の暮、壯健
つた婿の中学校長(註女城智氏)の急死で、さすがに弱
つたように聞いていたが、今は前通り元氣を回復し
かくしやくそのもので、耳もよし、新聞は眼鏡なし
で讀み、その上健脚で、二里くわいの道は下駄
きでずんずん歩く。

友のめつる婿の急死に弱れりし

従兄は軽く米壽をむかへし

めでたくも米壽となるおが従兄

ハキ口の道をまも従兄

辰吉り辰吉りと旧友が亡くなつてゆくのは、まこ
とに寂しいが、考えてみれば罪はこちらの長生きに
もあると苦笑を禁じ得ない。

いま一人、もう少し若い友人(註山手山申道夫氏)に招
かれ一夜語り合つた。この友人のお父さん(山中盛太郎
は、わたしの養父ととも旧藩主毛利家の重役であ
つたし、また養父が頭取としていた銀行(善住信託銀行)
の常務でもあつて親しい間柄として、わたしもお目
にかかる機会が多く、よくお顔をお見えていた。

ところが友人の頭のつるつるした禿工合から、何
ともいえないゆきしい目元が、お父さんそつくりで、
そぞろに任時を追憶せしめられた。

亡き父に禿も目もともよく肖た

道夫之歎及道夫が歎尔歎、歎れと替りし

いしへぎ今にかたんに語りつ
歎めども尽きず夜はふけはけり

(註) 山中道夫氏の独歩についての悪い出語。

——当時(明治三十四、三十五年頃)坂本邸の前の道路の片
側は、桜と柳の若木を交互に植へて、それに添木と
横に渡してくりのけてあつた。

或日、私がちやうど坂本の前通りでその横木につかまつて
横柄棒のまねごとをしていると、白い坂本の三階か
ら、先生(独歩)がこちらに向つてしきりに手招きをさ
された。

それで坂本の二階上つて行くと、先生は私にすばらしく
美しい一枚の傘をくれた。その傘の美しかったこと、勇ましく
かつた事は今でも目に残つていふほどだが、それが女郎の
関羽の傘であることは後で知つた。

関羽が白馬に跨り、青竜刀を振りかざしているのであつた。
青竜刀に刻まれ左紅い血流し目にはぬいりするような惨物色
の傘であつた。

私はよほど嬉しかつたとみえて、その傘を手にする迄とに
かく一目散走りに逃げ駆けこむようにして持ち帰つたのを憶
えている。その傘は大切に保存して、此(こ)にありわし
な(か)と標すけれども見つからない。

「風鈴」より

近頃は帰郷の度毎に、息抜きに一晩長谷の菅画伯

(二節) 定に厄分はなる例になつた。
所から少し遠く離れ、かつ環境がよびのぞあるか
こころに思はるはる訪ねて下さる方がおられるか、
知れ友人はがいで、かんがひする馬けてある。

床の上の茶山水の花白く

風の楓葉が葉は赤く下りて、
生きのよき、
生きのよき、
生きのよき、

生きのよき、
生きのよき、
生きのよき、

アトリ工の隅下立てたる十五号

さやけき河に若鮎の群る

（註）の二年秋、佐伯市教育委員会、佐伯史談会共催の

「佐伯の歴史と文化と語る会」が開催され、山名驥氏、

山中道丈氏、菅一即氏其他を講師としてお招きしま

した。

山名翁は因水由雅歩について、山中氏は旧藩主毛利家
について、菅画伯は佐伯出身の彫刻家について、それそれ
淡々と述べられまし左が、ご杜使な三氏に接して、
心撥まるものがありました。

山名翁は佐伯市の最長年者、明治四年生まれ一百
才です。三氏のご健在の程を切にお礼申し上げま
す。

② 山手区の間際通りは舗装まできあがり、よび敷歩道
となりました。一方、長谷の菅画伯御遺宅は住宅が立ち
並ぶ昔の面影がうすれつつあります。

中根貞考翁 略歴

東大政治学科卒業後、日本銀行入り、ロンドン在勤

二回。国庫局長から大坂支店長となり理事兼任。

本店帰任後、当時の三十四銀行、山口銀行、鴻池銀

行の三行合併して、現在の三和銀行を創立する也、迎

えられて初代の頭取に就任、在任十二年。

昭和二十年十一月引退。その後、持株会社整理委員

会委員長の内命を受け、準備中昭和二十一年三月貴族

院議員に勅選。秋集「庸微」のため追放となり辞職。

昭和二十六年解除。
著書に「帰路」「ふるさとの旅」「白桦隊」「庸微
」など、戦後には「矢野龍溪」「伊藤」「故郷難忘」
「帰去来」などがあります。

探訪記

津久見・白桦・野津探訪記

会長 高木 吉田 雅 輝

一月二十四日、本会の研修の一環として探訪の探訪を
行つた。午前八時大手前に集合した一行、九時を過ぎて
マイク口バスは上浦に向つた。

佐伯・津井のコースはこれまで何回か通つた道である
が、左手の山景色、右手の海景を、いつ見ても別分ぬ眺
みである。

ゆがいて津井峠に分かる。ここから津久見を経て白桦ま
での海岸道路は、初めての人もおつたと思ふが、木知の
人には是非すすめたいコースである。

峠を上るときの下界の眺め、峠を越してからの右方に
展開する海を眺めれば、正に絶景である。

此越り冬風の海見之かくれ 長良子

津井峠、日代峠、津久見峠は雪かきなワルカララを
越えて心を楽にさせる。私は通りすぎる沿道の眺めに旅
の楽しみを見出す。それは初めて、峠をよむが、再遊三
遊は更に可である。

津久見では大友宗麟の墓に詣でる。淋しかつた宗麟の
晩年を偲ばせるたたずまいである。耳川の氣に吹かれて勢
威はこぼれ、神仏を迫襲して人心を矢い、酒色に溺れて
正妻から白桦城を追われた宗麟の憤怒たる姿が、古らり
と眼前を横切るのであつた。

津久見峠を越えた所で、白桦から通り来た高橋
長平忠堂、迎藤正義両氏と出会う。首難いことである。